

『ヴィジョン』における神話性

— イェイツとポストモダニズム —

佐 橋 里 美

I

ダニエル・オハラ(Daniel O'Hara)は、イェイツ(William Butler Yeats)の、20世紀の批評の動向における重要性について以下のように述べている。

One of the more remarked but less closely pondered aspects of American critical theory over the last four or so decades is the persistent centrality of Yeats to its development. I can think of no other modern literary figure, with the possible exceptions of Stevens or Joyce, whose work has been so seminally influential. The major critical movements from the 1940s to the 1970s--New Criticism, archetypal and phenomenological criticism, and a variety of post-structuralist discourses (revisionary psychoanalytic criticism, dialectical hermeneutics, and deconstruction) all owe a considerable debt to Yeats. (349)

オハラは、ここで、ポスト構造主義にいたる20世紀の主たる批評にとって、イェイツは重要な位置を占めてきたとしている。イェイツは、一般にモダニストの旗手とされてきた。¹しかし、イェイツの作品がオハラの言うように70年代以降の批評にとってまで何らかの役割を果たし続けたとしたなら、それらの作品はモダニストの枠組みから敷衍されてくる問題をかかえていたはずである。本稿は、イェイツの『ヴィジョン』(*A Vision*, 1937)²において、その特異な書記形態から生じている言説上の断絶性を、神話性という観点から問い直す試みである。神話という概念は、しばしば、その批評の性質を示すメタファーとな

ってきたように思われる。それゆえ、『ヴィジョン』の神話性を問うことは、『ヴィジョン』のエクリチュールとしての時代性を明確に浮かび上がらせてくれるだろう。

II

はじめに、本稿で用いる神話性とは、20世紀における言語観の変化を背景としていることを示したい。神話という概念の曖昧さは、神話という語がテーマ、形式、機能等様々に論じられてきたことによる。ユング(Carl Jung)、フライ(Northrop Frye)は、歴史的に集積されてきた言語構築物を、祖型そのものの存在を前提として形而上学的に論じた。またレヴィ＝ストロース(Claude Lévi-Strauss)による構造分析も、祖型を前提としている。一方、エリオット(T. S. Eliot)やカーモード(Frank Kermode)がモダニスト達の秩序回復のために構築されたと論じた理想的なヴィジョンとして用いられる神話がある (Eliot 177-178; Kermode 93-124)。

こうした神話の概念は、それぞれ20世紀の批評の流れと結びつくと考えられる。ユングの神話批評、精神分析学的方法、フライの原型批評、そしてその新批評との結びつき、レヴィ＝ストロースと構造主義といったようにである。そして、これらは、いずれも神話を祖型、あるいは理想的なヴィジョンといった対象物を中心として、結果的に、形而上学的にとらえた。このような、ある思考において事物や対象物の存在そのものがア・プリオリなものとして前提となっている場合、そうした思考の背景にある言語観においては、言語の指示するもの(reference)は何らかの形で存在するという意識が存在することになる。そして、神話の概念に関していえば、祖型そのものをいかにとらえるかが、批評の性質を決定する。³しかし、ロラン・バルト(Roland Barthes)は、神話について以下のように述べて、神話の概念を対象物によって、つまり祖型を中心として考える神話のとらえかたから、その意味作用のありかたに移行させている。

It can be seen that to purport to discriminate among mythical objects

『ヴィジョン』における神話性

according to their substance would be entirely illusory: since myth is a type of speech, everything can be a myth provided it is conveyed by a discourse. Myth is not defined by the object of its message, but by the way in which it utters this message: there is no 'substantial' ones. (109)

ここにおいて、バルトは神話の概念をある言説がもつ実質(substance)で規定することを退けている。これは、言い換えれば、言語が実質を示すという考え方を排除していることでもある。そして、神話を規定するものが意味作用のありかたへ変化したということは、対象によって規定される神話というよりも、何が、つまり言語のどのような性質がある言説を神話として存在させているかという神話性へ、興味の対象が変化したことでもあった。こうした変化の背景には、事物の存在そのものは記号としての言語を媒介として思考する人間の認識の一つのありかたにすぎないという意識が生じはじめたことがあった。言語における指示性への信頼、シニフィアンとシニフィエの結びつきへの信頼が崩れたからである。こうした言語観の変化を背景とした神話性に関して、エリック・グールド(Eric Gould)の見解は示唆的である。グールドは神話性を、人間の決定的な根源の消失への意識から生じるものとしている。

If there is one persistent belief in this study, it is that there can be no myth without *an ontological gap between event and meaning*.... The absent origin, the arbitrary meaning of our place in the world, determines the mythic, at least in the sense that we cannot come up with any definitive origin for our presence here. (6)

人間の決定的な根源の消失への意識とは、また実体としての現実の消失への意識でもある。そして、この意識は、媒介である記号としての言語の二重性(duplicity)に対する認識とともに生じたものであった。こうした状況の下、神話とは、この世界に対し、意味付けをおこなうことにおいて言語構築物に負うとき、つまり、説明しえぬものを説明しようとするために言語の不十分さによらなくてはならない限り存在するのである(Gould 11)。つまり、神話とは、言語の、経験

に対する不十分さへの意識から生じているといえる。そして、このような意識は、根源を欠いた言説としてあらわれるといえる。その結果、神話には、一般的に神秘的かつ超自然的な(numinous)要素が存在することになる。そして、『ヴィジョン』にも、この要素は認められる。つまり、『ヴィジョン』における神秘的かつ超自然的な要素は、その成立がイエイツの妻の自動筆記といった不合理・不可思議な出来事からはじまっていることによって生じ、その意味において神話的な志向が認められるというのではない。むしろ、『ヴィジョン』の特異な書記形態において、そのような志向は認められるのである。

『ヴィジョン』は「エズラ・パウンドに当てた文集」(“A Packet for Ezra Pound”)、「マイケル・ロバーツとその友人達の物語」(“Stories of Michale Robartes and His Friends”)、「月の諸相」(“The Phases of the Moon”)、第一篇「大車輪」(“The Great Wheel”)、第二篇「完成された象徴」(“The Completed Symbol”)、第三篇「判断される魂」(“The Soul in Judgement”)、第四篇「古代の人々の大周年」(“The Great Year of the Ancients”)、第五篇「鳩あるいは白鳥」(“Dove or Swan”)、そして「万霊祭の夜」(“All Souls' Night”)の小篇からなる散文集である。この散文集の主たる内容の成立に関しては、序文で語り手が明らかにしているように、1917年10月24日、結婚4日目の午後に突然始まったイエイツの妻の自動筆記(8)について、一人称語り手である著者イエイツが記録・編集する形をとっている。こうした『ヴィジョン』のテキストを特徴づけているのは絶え間ない、断定性と曖昧性の弁証法である。言い換えれば、一貫してこのテキストの中で目されているように思われる、世界を体系づける象徴・真理への欲求と、読み手に対してその開示が必ずあると期待させるかのような語り手による書記行為が存在する一方で、テキストの根源に対する隠蔽が、様々な形で、持続されていくことによる不決定性、あるいはあたかも意図的につくりだされているかのように思われるような断絶性が認められ、テキストの信頼性が自ら崩壊していく点である。そして、このような、情報を与える一方で、解釈を拒み、収束されえないテキストであり続けようとする性質が存在するという逆説から、『ヴィジョン』における神秘性は生じているのである。断定的な要素のもっとも顕著な例は月の二十八相にもとづいて世界を体系

『ヴィジョン』における神話性

づける試みである。これは、「主観性」と「客観性」、「始原性」と「対抗性」といった対立概念の相克と「意志」「仮面」「創造心」「運命体」という四つの機能を月の二十八相それぞれに配置し、人間の精神性や行動様式を範疇化する試みである。この体系においては、“Man seeks his opposite or the opposite of his condition, attains his object so far as it is attainable, at Phase 15 and returns to Phase 1 again”(81)。この体系にはいわゆる大車輪の図表と四つの機能の精密な表があたえられ、この図表に則して記述の説明が展開されていく。たとえば、こうした体系描写の中心をなす「大車輪」においては以下のように月の二十八相が記述されていく。

PHASE ONE AND THE INTERCHANGE OF THE TINCTURES

As will be seen, when late phases are described, every achievement of a being, after Phase 22, is an elimination of the individual intellect and a discovery of the moral life....

PHASE TWO

Will--Beginning of Energy.

Mask (from Phase 16). *True*--Player on Pan's Pipes. *False*--Fury.

Creative Mind (from Phase 28). *True*--Hope.

False --Moroseness....

Body of Fate (from Phase 14)--“None except monotony”.

When the man lives out of phase and desires the Mask....

PHASE THREE

Will--Beginning of Ambition....

Mask (from Phase 17). *True*--Innocence *False*--Folly. *Creative Mind*

(from Phase 27). *True*--Simplicity. *False*--Abstraction.

Body of Fate (from Phase 13)--Interest.

Out of phase.... (105-108)

こうした完全な範疇化にもとづいた体系づけの試みは、人間の長い歴史における欲望であった自らがもちえる言語をもちいて世界をまさに再現する試み (representation) である。そして範疇化に示されるように価値概念を存在させる

ような二項対立への信頼が認められる。ここでは、言葉に確固たる信頼を置く人間の認識が、あまりにも、おもむろに提示されていることになる。『ヴィジョン』においては、こうした、あたかも決定的な内容が、断定的な情報によって伝えられていくことによって、この世界を示す象徴の開示(revelation)への期待と執着が存在し強められていく。しかし、その完全な開示はないままおわる。最終部において、語り手は、以下のように告白する。

Day after day I have sat in my chair turning a symbol over in my mind, exploring all its details, defining and again defining its elements, testing my convictions and those of others by its unity, attempting to substitute particulars for an abstraction like that of algebra.... Then I draw myself up into the symbol and it seems as if I should know all if I could but banish such memories and find everything in the symbol.... But nothing comes--though this moment was to reward me for all my toil. Perhaps I am too old.... (301)

象徴の完全な開示が実現しなかったことが、“nothing comes”と表現されているように、ここにおいては語り手は、あくまでも受け身的な位置に留まっている。そして、語り手は、自らの知覚の限界に対して、それまで全篇を通じての説明的態度により強められてきた世界を体系づける象徴の開示に対する期待・執着を裏切る形で、自らの老齢のみを理由にあげている。テキストにおける様々な図表・精密な体系描写といった記述的性質とは相容れず、最終部での語り手の断念に対する明白な裏付けがないことにより⁴、開示されるように期待されてきた象徴に対する隠蔽が持続され、このテキスト全体を取束されえないものとしている。

このように、『ヴィジョン』のテキストにおいては、隠蔽が存在し、テキストの曖昧性を強めている。そのもうひとつの例が、『ヴィジョン』の成立に関し、その主たる部分を占める世界体系の出所に関し責任が還元されていくような著者が不定のままで終わることである。さきに述べたように、『ヴィジョン』の世界体系に関する主たる部分は語り手であるイエイツの妻が、目には見えぬ伝達者(communicators)⁵の声を自動筆記したものを、イエイツが編集する形式を

『ヴィジョン』における神話性

とっている。この点においては、伝達者には一定の威厳(authority)が与えられているといえる。自動筆記の始まりをのべた箇所明らかにされるように、語り手にとってほとんど判読不可能な文字が与えられることによって情報の遮断が行なわれる事実もその点を示している(8)。また、伝達者は語り手に対し、哲学書を読むことや他人に伝達者の伝える内容を洩らすことを禁止する(12)。しかし、伝達者に唯一完全な威厳が与えられていないことは、すぐに明らかとなる。その一つの例として妨害者(Frustrators)の存在があげられる。彼らの存在により伝達者と語り手のコミュニケーションは混乱させられると、語り手は以下のように報告している。

Because they must, as they explained, soon finish, others whom they named Frustrators attempted to confuse us or wast time. Who these Frustrators were or why they acted so was never adequately explained, nor will be unless I can finish "The Soul in Judgement"(Book III of this work), but they were always ingenious and sometimes cruel. The automatic script would deteriorate, grow sentimental or confused, and when I pointed this out the communicator would say, "From such and such an hour, on such and such a day, all is frustration". (12-13)

語り手の告白によれば、妨害者達のアイデンティティも、伝達者と語り手の交信を妨害する理由も不明である。そして、ここで、妨害者のアイデンティティは後に明らかにされることが約束されながらも、最終部にいたってもその実現はない。重要なことは、こうしたアイデンティティが明らかにされることが遅延化され、隠蔽されたままでおわる妨害者達によって、自動筆記の内容が劣悪になったり、感傷的になったり、混乱するといったテキストの成立の信頼性にかかわるような影響が生じるという事実である。妨害者達のアイデンティティが隠蔽されたまま終わることは、『ヴィジョン』のテキストの信頼性が曖昧のままで終わることの一例となっているのだ。

第一人称のこの語り手、つまりイエイツ自身に威厳が与えられているかのようには思わせる事実もまた存在する。伝達者は、イエイツが1918年に出版した『月

の沈黙を友として』(Per Amica Silentia Lunae)からも内容を借用していると告白する(8)。さらに、イエイツは、『ヴィジョン』の1925年版について、意図的に自分や妻が著者である事を隠そうとしたと告白している(19)。この隠蔽は、実際、彼の著者としての威厳を強める結果となっているといえる。

しかし、ここで忘れてはならないのが、『ヴィジョン』の中でも、世界体系を描く主要部分、すなわち第一篇「大車輪」から第五篇「鳩か白鳥か」にいたるまでイエイツの妻の自動筆記を媒介として始まったという事実である。開示されるべきものから伝達者、妨害者、そして妻と三重の介在を受けている存在の語り手は、世界体系の主たる内容に関し、その責任を担うには、もっとも遠い存在のように思われる。実際、語り手は、伝達される内容に対して理解が困難であることを繰り返し告白している(80)。あるいは、また、自動筆記によって示された月の二十八相とそれぞれの相における四つの機能についての一覧表をもし失ってしまったら、決して再現できないとも告白している(87)。こうした語り手の告白は、彼自身もまた『ヴィジョン』を成立させているはずの根源から疎外されていることを強調してわれわれに伝えているように思われる。

ここで、もちろん、われわれが看過してはならないのは、こうした開示されるべきものに対して責任を持つものが曖昧な事実、精密な世界体系の描写といった断定していく動きと相反して、その責任をもつものが隠蔽されていくことによって生じる一種の断絶性は、じつはわれわれが、第一人称のこの語り手に全く依拠することによって生じているという事実である。すなわち、テキストの威厳の源の不在というのも実際語り手によって、すなわち作者イエイツ自身によってあたかも意図的につくりだされているように思われることである。

しかし、『ヴィジョン』における根源の不在が、語り手によって意図的に生じさせられたものか、あるいは、語り手にそうした意図はなかったのかということとは、今、ここで重要ではないだろう。もし、語り手の意図性に着目したとしても、問題となるのは、なぜそのような操作をしなくてはならなかったかという根源の不在への意識が問題となり、テキストにおいて、根源の不在が純粹に自律的に生じたものであると考えても、テキストにおけるそうした不在への意識が問題となるからである。

『ヴィジョン』における神話性

このように、根源が隠蔽されたままの『ヴィジョン』は、一見、記述的な形態をとることによって書記行為を前面に提示しつつ、一方で何も表現することのない、自己言及的(self-referential)テキストである。そして、この事実は、『ヴィジョン』全体の中で、一見その意義を見だしにくい「マイケル・ロバーツとその友人達の物語」を考察することにより、一層明確となるのである。305頁の『ヴィジョン』全体の中で、わずか24頁の、それ自身一見脈絡を欠いた、一種笑劇(farce)とも呼べ、またイエイツ自身が一人称語り手となり世界体系の記述的説明を行なう、あるいはその説明を行なうことになった顛末を説明する他の篇との繋がりに欠いているように思われる、この「マイケル・ロバーツとその友人達の物語」は、しばしば批評家達によって無視されてきたように思われる。⁶ その中で、ハロルド・ブルーム(Harold Bloom)が、以下のように指摘しているのは重要であろう。

We must be wary of Yeats when he shows his own uneasiness by grotesque self-referential ironies in the introductory parts of the book, and even more when he has the instructors say that they have come primarily to give him metaphors for poetry. (210)

ブルームも詳細な分析は避けているが、彼の指摘するとおり、この物語は、甚だしく自己言及的なものである点において、真の意味で『ヴィジョン』の導入部となっている。すなわち、ジョン・ダッドン(John Duddon)の署名入りで報告される一連の出来事とジョン・アハーン(John Aherne)の署名入りのイエイツに宛てられた手紙とで成り立っているこの物語を特徴づけているのも、やはり断定性と曖昧性の弁証法であり、しかも『ヴィジョン』の他の篇以上に、虚構に対する自意識を示すことによって、自己言及的なものとなっているのである。この虚構に対する自意識は、この物語においては、しばしば「事実」あるいは「真実らしさ」が誇張されることによって、逆説的に示される。たとえば、物語の前半で語られているのは、ギリシア・ビザンチンの歴史、スイフト(Jonathan Swift)やカント(Immanuel Kant)にまで言及した文明論と日常の色恋ざたである。こうした一連の出来事は、自分の身の回りに起こった、あるい

は自らが招いた、因果関係を持つような理性から成り立つ行動とは程遠い日常の出来事を、まず各個人が報告する形式をとっているゆえ、その話の信憑性が曖昧であることがより誇張される結果となっている。そして、この事実は、ジョン・ダッドンの署名入りの報告の形式をとることによってより強調される。記録という一般に書記形態の中でもっとも静的・記述的な形態をこの物語の前半がとっていることにより、この物語が虚構であり挿話にすぎないことが逆説的に強調されるのである。

さらに、物語の後半、すなわち、ジョン・アハーン(John Aherne)からイエイツへの手紙においては、自己言及の性質が一層明確にあらわれている。この手紙においては、ロバーツ(Michael Robartes)、オーウェン・アハーン(Owen Aherne)といった架空の登場人物に示される虚構の次元と、『ヴィジョン』の作者であるイエイツという実在人物で示される、いわゆる現実の次元が混在している。しかもこの手紙において中心的な話題となっているのは、イエイツの作品の中でも『ヴィジョン』そのものや『ヴィジョン』にもっとも密接にかかわった内容に関しての批評なのである。つまり、ここでおこなわれているのは、「マイケル・ロバーツの二重の幻」(“The Double Vision of Michael Robartes”)、そして「ハルン＝アルラシッドの贈り物」(“The Gift of Harun Al-Rashid”)についての事実関係との照応・是非を明らかにするということなのである。架空の人物による手紙によって、『ヴィジョン』の実際の作者イエイツと、『ヴィジョン』に密接に関係を持つ彼の作品が前景化し、しかもその手紙において、日記との照応をもとに批評されることで明らかなように「事実」というものの重要性が強調されることによって、いわゆる「事実」あるいは「現実」の範疇が持つ規定の力が逆説的に問われる結果となっている。つまり、この手紙を含む「マイケル・ロバーツとその友人達の物語」は、その内において、虚構をつくりだす自らの言語行為に対して意識的なテキストであることを示すと同時に、一見静的な記録的、記述的形態をとり世界を体系におさめるという目的のもとに成立している「大車輪」以下の篇が、じつは規定・断定という概念を保証する虚構と現実、虚偽と真実という二項対立が崩れている、あるいは意識的に操作されるものにすぎないという意識のもとで成立していることを示す

『ヴィジョン』における神話性

ことによって、真の意味で『ヴィジョン』の導入部の役割を果たしているのである。

III

『ヴィジョン』においては、その特異な書記形態から生じる断絶性、いかにすれば、断定的に情報を与える一方で、解釈を拒み、収束されえないテキストであり続けようとする性質が存在するという逆説において、神話性を認めることができる。

先に論じたように、神話性とは、シニフィアンとシニフィエとの乖離から生じる言語の二重性への認識による、言語の、経験への不十分さへの意識の産物であった。こうした、言語が経験に対して不十分であるという意識は、モダニズムの危機においてとらえられたものであった。ロナルド・シュライファー (Ronald Schleifer) は、言語の不十分さとモダニズムの危機について以下のように述べている。

That crisis was most starkly expressed (not self-consciously “staged”) in the symbolist movement in literature, of which Arthur Symons said that Yeats was the chief representative in English (*Symbolist Movement*, xix). It was so because the crisis of modernism is best understood as predicated on a conception of the *inadequacy* of language to experience--the inadequacy, that is of any “natural signifier to the transcendental signified of an hypostatized *nothing* (what Yeats variously called the “immortal moods,” “the Divine Essence,” or simply “perfection,”) that symbolism attempts to delineate. (19)

ここで明らかにされているように、モダニズムの危機は、経験に対して言語が不十分であるという概念、すなわち不毛で混沌とした当時の世界を対象とすることでまだ実体は与えられていた「無」(nothing) というシニフィエに対してのシニフィアンの不十分さへの認識の中にあった。この認識の下では、表現されえないもの、語られえないものをいかに表現するかが問題であり、その結果シ

ニフィアンに関心は移った。このシニフィアンへの関心において、われわれは、いわゆるモダニズムとポストモダニズムの連続性を認めることができる。⁷

しかし、モダニズムのこうした意識のもとでは、再びシュライファーの言葉を借りればパロディ(parody)、軽蔑(disdain)、そして幻想(vision)といった否定的な言語(antithetical language)を用いさえすれば、当時の混沌とした世界に反応することは可能であるとの認識があった(19)。しかし、ポストモダニズムの意識という範疇分けが可能ならば、シュライファーが、ジェイムスン(Frederic Jameson)の言葉を借用しているように、その言語は死せる言語(dead language)とならざるをえなかった(Jameson 65)。言語が構築するはずの実体という概念そのものへの懐疑が生じたからである。こうした、実体への懐疑は、モダニズムにおけるシニフィアンへの関心をさらに推し進めて、シニフィアンの自律的な戯れにのみ、この世界は成り立っているという見方をもたらした。こうした意識の下では、文学作品は、必然的に自己言及的にならざるをえない。

『ヴィジョン』に対するこれまでの批評・評価は、イエイツが深く関わったとされる神秘主義の集大成として、詩・劇作品との関連で論じられるという、いわば、静的な思想書との見方が中心であった。⁸しかし、『ヴィジョン』は一見世界を体系におさめるという静的な形態をとることによって、書記行為そのものをおもむろに前面に提示しつつ、決して収束されえないテキストである点で、つまり決定的な内容を表現するという点を欠いている点で、人間の言語行為とその対象の存在そのものへの懐疑を示していると考えることが可能である。そして、この点において、イエイツの晩年近くなって大幅な修正を施されたこの作品は、多分にポストモダニスト的であるといえはしないだろうか。

注

本稿は、1991年10月5日、三重大学にて開催された日本英文学会中部地方支部第43回大会における口頭発表を基にしている。

1 イエイツとモダニズムの一般的な関係については、以下を参照。Kermode 93-124;

『ヴィジョン』における神話性

- Garratt 16-43; Kearney 9-30; Parkinson.
- 2 訳語に関しては、鈴木を借用あるいは参考にしている。
 - 3 祖型を記号として、神話について考察することについては、Gould 33.
 - 4 シェリル・ハーは、『ヴィジョン』の歴史書としての曖昧さを “in *A Vision*, the defeat feels global, unequivocal, highly frustrating, and defensively rationalized” と表現している。Herr 147.
 - 5 伝達者は最初 “communicators” とよばれ、のちには “Instructors” とよばれている。
 - 6 この物語については、本稿のテーマとは異なるが、バーバラ・クロフトが、もっとも詳細に論じている。Croft 93-134.
 - 7 モダニズムとポストモダニズムの連続性については、以下を参照。Cascardi 275-310; Eysteinnsson 103-142; Falck 148-170; Hassan 25-96; Poster 12-33; Pippin 148-167.
 - 8 『ヴィジョン』に対するこうした見方については、たとえば、Blackmur 105-123. また、イェイツと神秘主義については、以下を参照。Flannery; Harper; Moore; Raine; Kinahan.

引用文献

- Barthes, Roland. *Mythologies*. Trans. Annette Lavers. London: Jonathan Cape, 1972.
- Blackmur, R. P. *Language as Gesture: Essays in Poetry*. New York: Columbia UP, 1981.
- Bloom, Harold. *Yeats*. New York: Oxford UP, 1970.
- Cascardi, Anthony J. *The Subject of Modernity*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Croft, Barbara L. “Stylistic Arrangements”: *A Study of William Butler Yeats’s A Vision*. Granbury: Associated University Presses, 1987.
- Eliot, T. S. “Ulysses, Order, and Myth.” *Selected Essays*. Ed. Frank Kermode. New York: Harcourt, 1975. 173-180.

- Eysteinsson, Astradur. *The Concept of Modernism*. Ithaca: Cornell UP, 1990.
- Falck, Colin. *Myth, Truth, and Literature: towards a True Post-Modernism*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- Frye, Northrop. *Anatomy of Criticism*. Princeton: Princeton UP, 1957.
- Garratt, Robert F. *Modern Irish Poetry: Tradition and Continuity from Yeats to Heaney*. Berkeley: U of California P, 1986.
- Gould, Eric. *Mythical Intentions in Modern Literature*. New Jersey: Princeton UP, 1981.
- Harper, George M. *Yeats's Golden Dawn*. New York: Harper and Row, 1974.
- Hassan, Ihab. *The Postmodern Turn: Essays in Postmodern Theory and Culture*. Columbus: Ohio State UP, 1987.
- Herr, Cheryl. "The Strange Reward of All That Discipline: Yeats and Foucault." Orr 146-166.
- Jameson, Fredric. "Postmodernism, or the Cultural Logic of Late Capitalism." *New Left Review* 146 (1984): 53-92.
- Kearney, Richard. *Transitions: Narratives in Modern Irish Culture*. Manchester: Manchester UP, 1988.
- Kermode, Frank. *The Sense of an Ending: Studies in the Theory of Fiction*. Oxford: Oxford UP, 1966.
- Kinahan, Frank. *Yeats, Folklore, and Occultism*. Winchester: Unwin Hyman, 1988.
- Machin, Richard, and Christopher Norris, eds. *Post-Structuralist Readings of English Poetry*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Moore, Virginia. *The Unicorn: William Butler Yeats' Search for Reality*. New York: Macmillan, 1954.
- O'Hara, Daniel. "Yeats in Theory." Machin 349-368.
- Orr, Leonard, ed. *Yeats and Postmodernism*. New York: Syracuse UP, 1991.
- Parkinson, Thomas. "Yeats and the Limit of Modernity." *Yeats: An Annual of Critical and Textual Studies* 3. Ed. George Bornstein. Ithaca: Cornell UP,

1985. 60-71.

Pippin, Robert B. *Modernism as a Philosophical Problem: On the Dissatisfactions of European High Culture*. Oxford: Basil Blackwell, 1991.

Poster, Mark. *Critical Theory and Poststructuralism: In Search of a Context*. Ithaca: Cornell UP, 1989.

Raine, Kathleen. *Yeats the Initiate*. London: Allenand Unwin, 1986.

Schleifer, Ronald. "Yeats's Postmodern Rhetoric." Orr 16-34.

鈴木 弘。『ヴィジョン』。東京：北星堂、1978。

Yeats, William Butler. *The Collected Poems of W. B. Yeats*. 1950. London: Macmillan, 1982.

---. *A Vision*. 1937. London: Macmillan, 1987.

Synopsis

A Vision as a Myth: Yeats and Postmodernism

By Satomi Sahashi

In this essay, I will argue about the contradictory impulses of assertion and evasiveness in *A Vision*. In *A Vision*, We can notice the discontinuity of discourse. This discontinuity is the result of the paradox of informative assertion and open-endedness. The contradictory impulses show the tendency toward the numinous in *A Vision*. Then, we can say that *A Vision* is mythic.

A Vision is very assertive in that it seemingly intends to reveal a symbol of the universe. Yeats systematizes "every completed movement of thought or life" into the twenty-eight phases of moon in "The Great Wheel." In this systematization and description, we can recognize the optimistic presupposition that man can represent the universe by way of language.

However, the undecidability of the authority in the work undermines the trustworthiness of the system of twenty-eight phases of moon. The source of the

system is never revealed. The concealment of the source makes *A Vision* very evasive. Then, we can find no reference in *A Vision* though it takes the accomplished form. *A Vision* is, in this sense, self-referential. "Stories of Michael Robartes and His Friends," one of the prefatory materials, also shows that *A Vision* is self-referential. In this story, the voices create the atmosphere of verisimilitude and reliability. The voices, however, create irony, contradiction, and doubt that undermine both verisimilitude and reliability. This paradox reveals that the story is written in a very self-referential way. The self-referential writing is one of the typical embodiment of mythical intention. The mythical intention comes from the recognition of the duplicity of sign.

The notion of the duplicity of sign is very post-modern. In fact, the anti-representational impulse exists in the writing in modernism. The difference between postmodernism and modernism is the difference of the notion of literary object. For modernists, the object was still hypostatized. Modernists concerned themselves with how to represent the unrepresentable, that is, the futility and anarchy of the contemporary world by way of language. However, for postmodernists, the correspondence between the signifier and signified is illusion. We come to be sceptical about the existence of literary objects.

The contradictory impulses in *A Vision* show that man can never fill the gap between signifier and signified. *A Vision* rejects the representation of a determined content. In this sense, *A Vision* precedes the postmodern.